今回の語ルシストの会の事例報告は福祉歴５０年及び宮崎市議会議員の嶋田喜代子氏に話していただきました。

最初に国富町出身で、5 人兄弟の末娘で農家の出身であり生活は苦しかったと話される。

昔は家に牛、豚、鶏など動物を飼っていて、子供が餌の当番などしたことを話され、幼少期は親兄弟に愛されていることを感じながらスクスクと育ったということで、この愛されたことが、その後の福祉の仕事に活かされることになったということである。

高校は、本庄高校に行き、中学校と合わせて６年間ソフトボールに明け暮れる生活で実力をつけて、卒業後は旭化成のソフトボールクラブがあったので行く予定でいたら、両親からこれからは専門的な技術を身に付けることを、勧められて県外の短期大学の保育科に行くことになり２年間寮生活をしながら２年の時に学生の自治会長に選ばれるという経験をされる。

卒業後、東京の児童養護施設に 18 年間務められる。
養護施設での子供との生活に関して、専門誌に取材された文章をコピーして配布される。

その記事によると、施設の子供がクラスの子にいたずらをしてケガをさせた時などに周囲の人からその子自身の問題として捉えずに、のぞみの家の子だからという態度で見られることに悔し涙がほおを伝わるぐらい、親子以上の信頼関係を築いていることを実感されたそうである。

その後、平成元年に帰郷後、保育所や綾町や宮崎市の特別養護老人ホームに 18 年間勤められ、平成 7 年から宮崎市の委託事業の在宅介護支援センター及び地域包括支援センターに勤めて地域での支援に携わることになる。

その後、平成 23 年に市議会議員に選らばれる。

という経歴を話されたのち、嶋田さんの支援の理念として、「人権」を基本に、その人の「生きる力」を発揮させることに力を注ぐことを最大のキーワードとして福祉の現場に携わって来られたことを話される。

そのような中で専門職としての在り方にも経験を通して語られ、時として専門職は相談者の困っている面ばかりを見て助言することが専門職としての教示だと思

っていることで陥りやすいのが、本来の生活を奪ってしまうことに至るということなので、そのことを意識しながら、本来の生活を取り戻すにはどのような支援が最適かを一緒に考えて支えるのが専門職のあるべき姿ではないかと話される。

何故、市議会議員になったのか、４０年福祉現場で仕事をしてきた中で予算に応じた仕事をしてきて、市民の声を聴いて行政や予算に反映されるために無駄な予算はないのかを仕分けできる立場で、必要な予算を計上できることが最大の市民に対する貢献と思ったので議員になられたそうである。

以下は、意見交換の内容でのコメントを抜粋しました。
・地域での支援で、相手がどのような態度であれ、支援者が諦めたら現状維持で生き辛さを改善されないことになるので、あきらめないで支援をすることによって信頼して話をしてくれるまで通い続ける。

・ゴミ屋敷だから土足であがるということを見過ごさず、その人の生活の在り方として、まず認める中から生き辛さを話してくるまで待つ。

・子供の現実は核家族になり子供の逃げ場がなくなってきている状況で、子供の社会的課題に対して表面的に解決されるだけで、根本的な原因を解決しない限り再び問題が表出する状況である。

・触れ合うことやスキンシップすることが、心を少しずつ解きほぐしていくための手段として相手を支えるには大事と話される。

次回は、７月２６日（金曜）、時間は１９時から２１時まで、
場所は、県福祉総合センター１階ミーティングルーム、